

おもしろきこともなき世を  
おもしろく

西松布咏

オミクロン拡大で騒然としている最中である。

三年ぶりのウキウキ気分が一変しての覚悟が必要な京都の旅となり何度も躊躇した末に一月十九日上洛した。

前回は麗らかな令和元年、名残の桜がまだ賑わいを誘う春。二十ほどの熊面をつけている「二十面相」とご自身をたとえるほど多彩な顔を持つ武田好史さんが河原町三条の町家ギャラリー「弱法師」で「月下驚嘆秘会」と題するコンサートを主催して下さった。間に隠れた桜にまつわる小唄や端唄、最後に富本「反魂香」を演奏した。

今回の旅のきっかけも桜。年末の居酒屋で、友人の画家「宮園母」の絵画展が仁和寺で開催するチラ



シを見た。月光に照らされた夜の海に咲く油彩「春の夜桜」に心を奪われ「この桜の前で唄いたい!」と思った。

早速彼女に伝えたら「仁和寺に逢いに来て!」と。かくして冬の京都の旅とあいなり、高校時代に習った兼好法師の「徒然草」にある「仁和寺の法師ありけり」の一節が記憶に残っているだけのお寺訪問となった。突然の思いつきだったので三味線は置いてきたが宮島弥山大聖院座主であられる吉田総長が面会して下さり「是非仁和寺の金堂でコンサートを・・・」などと夢のようなお話をいただき、まさに桜の花びらが縁を結んで下さったような佳き日となった。

興奮覚めやらぬ翌朝、宿から程近い賀茂川沿いを散歩した。まだ明けぬ薄墨色の空にゆっくりと頬かな紅色のひと削毛が滲んでゆき浜千鳥が羽ばたいて朝を告げる。川の流れには鴨が睦ましく顔をうばっている。今私は京都にいます。寒さを感じないほど静かな喜びに満ちていた。

宿への帰りを高瀬川の流れのままに三条大橋を歩いて見覚えのある寺の門に差し掛かった。なんとそこは七年前に出逢った豊臣秀次所縁の「瑞泉寺」あまりの出逢いに過ぎし日の思いが蘇る。

秀吉に謀反の疑いをかけられ切腹して果てた秀次の三十一名の一族と共に処刑された十五歳の美少女「駒姫」の辞世の句を唄いたいと、二〇一七年に「アジール」と題して野沢麗雲寺で上演したことがあった。その時の感激を思い出し今回の旅の重さをつくづく噛みしめた。

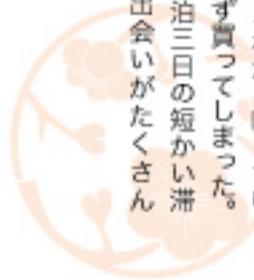
それからは夢遊病者のように河原町界隈を彷徨い江戸の女になった気分が明歴二年創業である京人形店「小刀屋忠兵衛」の行まいに惹かれ店に入ってみた。御所人形や季節に因んだ雛人形に交じって「幕末物



語・奇兵隊高杉晋作」の作品に目が止まった。高杉は幕末の革命児と言われ詩や唄を好みいつも三味線をそばに置き芸妓遊びを良くし「三千世界の鴉を殺し主と朝寝をしてみたい」などの都々逸を口ずさんだときれる粋人でもある。

辞世の句「おもしろきこともなき世をおもしろくすみなすものは心なりけり」の掛け軸を背景に刀と三味線が立てかけてある。刀にまつわる悲劇と憂き世を生きぬくための三味線。私のこれから唄ってゆくべき道を暗示しているようで迷わず買ってしまった。

今回は緊急事態であったので二泊三日の短かい滞在となったがこうした懐かしい出会いがたくさんあった。





今から十五年前の夏、三味線との一人旅でお世話になった円山公園の「基中庵」を営む小夜さんにお会い出来たのも嬉しかった。  
一人きりの客なのに変わらぬ静かな微笑で迎えて下さり、しみじみ美味しいおばんざいの朝食の前に朝風呂を沸かして下さるさりげないおもてなしを。前日から降り続いた雪は帰る日になっても止まず二間続きの部屋を午後まで独り占めにして惑越しの雪景色との静かな時間を作って下さった。  
そして冒頭に書いた武田さんとも三年ぶりに祇園

の「古美術・近藤」でお会いした。四国の春日大社の宮司でもあられる店主の近藤さんがお抹茶を点てて下さり骨董の話を交えいつまでも尽きぬ「よもやま断」を伺え至福のひとつだった。

そして駅まで送っていただく時間までと、切り通し路地を曲がり「権兵衛」の暖簾を潜り小座敷で熱燗を差しつ差されつ。伝統芸能の持つ意味や深い魅力を紐解き、暗闇で音を聴くと無限の拡がりを感じることが出来る。だから盲目の法師から始まった地唄は心に響く。明かりは行燈と書くように行くべき道を導いてくれる・・・と嬉しくなるようなお話を沢山して下さり締めめぬ陥かけうどんで身も心も暖かくなり京都を後にした。

これからもコロナの拡大や天災、人災で辛い憂鬱な日々が続くけれど面白きことも無き世を面白くすみなすものは心なりけり・・・  
京都で出会った数々の言葉の如くすみなす心で生きて行きたいと思う。

## 今年の漢字

内波純子

令和三年暮、「今年の漢字」は「金」とのこと、なかなか収まらないコロナ禍の中開催されたオンラインピックに因んだ一字なのでしょうが、何だかしっくりこない感もありました。

そのオンラインピックも終わった八月、診ていただいているクリニックの待合室で原かほる先生のプロフィールの中の「三味線と小唄」の文字に目が留まりました。お三味線には漠然とした憧れがありましたが、音楽は学生時代に少しばかりの管弦楽の経験以外は門外漢で、ましてや邦楽の知識は全くありません。



せん。何処で何方にお習いするものなのか、見当もつきませんでした。

診察の後、思い切って、本当に思い切って、「お三味線をなさってるんですか」と伺い、「月三回、一回四十五分のお稽古です。西松先生とおっしゃいます。ご紹介します。連絡なさって下さい。」とお優しく、テキパキといただいたお言葉に甘えた。  
ドキドキしながらお電話し、ドキドキしながらお

稽古の見学に伺いました。稲生先生のお稽古で、お話を伺うことができました。

お三味線のお師匠さんはどのような方なのか、お三味線と小唄はセットなのか、何もかも初めてでわからないことだらけでしたが、今までやったことのないことを始めてみようと思いい、九月からのお稽古をお頼みした次第です。

それから四ヶ月、私がお稽古をつけていただいている曲はまだ短いのですが、師匠にかかるとこんなにも豊かなふくらみを持つものかと感嘆するばかりです。布詠師匠の三本の弦と声によって、百年以上も前の町並み、樹々、日本家屋の陰影の中の男女が明確な輪郭を持って色付き、風は馥郁たる香りを運びます。

しかし、いざ、お稽古となると、「私って音痴？やっぱり」と思いい、三味線の三の糸が切れた時には「もう、壊しちゃった？」と大慌てです。師匠の「そう」、「まだまだですね」、「少し入りましたね」等々のお言葉をいただいお稽古場を後にする時には、その日の仕事を終えた気がいたします。

十一月二十八日の「美紗の会」にもご一緒させていただきました。

お話をいただいて、「できません」と申し上げた私に、「大丈夫です。私がちゃんと導きますから。」と仰って下さり、またまたドキドキの一日でした。

人前で歌うこと、艶っぽい歌詞、正座、和服、少しずつづれながら、でも重なり合う糸と唄、非日常の時間をいただきました。

温かく迎えて下さった布詠師匠、きっかけを作って下さった原先生に心からお礼申し上げ、ご縁をいただいた先達の皆様について参りますので、どうぞ、よろしくお願いいいたします。

令和三年の私の漢字は「糸」だと思っております。

### 江戸の粋を感じてー 第六十二回美紗の会のつどいを聞いて ヤリタミサコ



二十一世紀になって二十年を過ぎたこの現代にあつて、江戸文化のたつぷり詰まった建物が見られるのは奇跡的かもしれません。山手線の田町駅の南側には、芝浦の見番だった木造建築物が港区立伝統文化交流館としてリニューアルされ、時代の流れを超越した風格でたたずんでいます。その前に立つだけでタイムスリップするようで、落語「芝浜」の潮風を一瞬感じました。江戸に生きた、職人や芸者の活気が空気の底から伝わる気がします。

建物に入って二階に上がれば、広々とした百畳座敷と舞台。この二年のコロナ禍の影響で人と人が集まるのがむずかしかったこともあり、聞き手も出演者もいつも以上に高揚した雰囲気でした。おそらく多くの芸能が稽古され発表されてきた場所の歴史が、空間を生き生きさせるのでしょう。見えない後押しをもらえば、美紗の会の皆さんの意気も上がる

というもの。

典咏さんの威勢の良い「紀伊の国」では、セリフのような唄のような発声が飛び抜けて弾んでいました。忠咏さんの美声は、江戸の旦那衆の懐の深さやその伝統を感じさせます。鶴咏さんの三味線と唄は粋な音色で、もっと聞きたいと思わせる巧者です。草咏さんの「反魂香」は気合いで挑んだイントロが迫力でしたが、全曲自分の唄になるまでもうひと頑張りですね。悠咏さんは情が深い表現が心に残りましたし、佳咏さんの落ち着いた唄は情景が浮かぶようでした。

最後の扇ひでさんの地唄舞は優雅そのもの。日本人形が動いているようで、見る者をうっとりさせる舞でした。布咏さんの唄も濃厚な情感極まる演奏で、この二年間聞くことのできなかつた美しい響きをライブで味わえる幸せを味わいました。

舞台転換や小道具の配置換えなど、会の皆様、俊咏さんや咏治さんたちが裏方を担当されての運営に、糸と声を通じた会の皆様のリレーションシップが感じられました。今後また皆様のご精進の結果を楽しみにしております。

### 「反魂香」

#### 己紗草咏

それは三年前の一月九日。年末から身体がダルク風邪を引いたようだとな近所の開業医に診てもらった。医師は念のために行った血液検査結果を見て、「血糖値が480(mg/dl)もある。このままでは命もあぶない。もっと大きな病院で診てもらった方がよい」と救急車を手配して下さい鴨川の病院に緊急入院した。

三日間の様々な検査の後、三人の医師は「考えら

れる検査は全て行いましたが、1型糖尿病です。糖尿病の95%は生活習慣病の2型糖尿病ですが、残りの5%がインスリンというホルモンが膵臓から分泌されなくなった1型糖尿病です。1型糖尿病は一生治らない病気ですが一日四回のインスリン注射を打ち低血糖に留意して規則正しい生活を心がければ健康的な生活を送ることは可能でしょう」と話した。

「やっかいな病気を背負いこんだ人間にとって、一番欲しいのは「普通」ということである。」という向田邦子の言葉が頭の中で点滅していた。体重が十六キログラム減り鬱々としていた。

一年が経過し医師の言う「規則正しい生活」にもようやく慣れてきたころ今度は新型コロナウイルス禍だ。「基礎疾患を有する高齢者」というグループの重症化率が高いと連日報道された。感染リスクをなくすには長閑なこの地から出ないことと我が家ではステイホームが標準となった。

ある時、師匠から「美紗の会ではZoomを用いた稽古も行っていますよ。貴方もいかがですか」とのご連絡をいただいた。早速ダウンロードし説明に従って使ってみた。試行錯誤の稽古の末、七月の「第六十一回美紗の会のつどい」は、Zoomで「三回」を演奏した。自宅で七月の大きな夕陽を浴びながら本当に本当に久しぶりに声を張り上げ、まさに「三回」の果報者になった嬉しさだった。機会を与えてくださった師匠と大変だった現場スタッフに感謝の意を表したい。

「第六十一回美紗の会」も終わりのんびりとYouTubeを観ていた。師匠の京都での演奏動画に出会った。ライブ感に溢れる「御所のお庭」。その気で次曲もと思いきや、なんだかよく解らないその曲の持つものすごい渾沌としたエネルギーに圧倒された。羽交い締めにもされ振り回されるようだ。この



エネルギーを感じる曲を自分も唄ってみたいと思っ  
た。初めての感覚だった。

師匠に京都で演奏された富本「反魂香」を習いた  
いのですが・・・と懇願したどうしても三年間の想  
いを込めて「我が思い叶えて賜れと」と、唄いた  
かった。

稽古は春琴抄のように撥を投げつけられたり、撥  
で打れたりすることはないものの、指導は殊の外、  
厳しかった。

あつという間に四ヶ月は過ぎ「第六十二回美紗の  
会のつどい」の一週間前となった。「やっと最低ライ  
ンまで来ましたね。これからが大事ですから繰り返し

し何度も唄い続けて下さいね。」との総評を頂いた。  
今回の稽古では「曲の熟成」について多大なるご  
指導をいただいた。時間を掛けて少しずつ練り上げ  
て曲の持つエネルギーを感じながら自分の曲にして  
ゆきたいと思う。

穏やかな日和の十一月二十八日「第六十二回美紗  
の会のつどい」は開催され無事終了した。会場はピー  
ンと張り詰めた中にも誰に対しても暖かみのある雰  
囲気に包まれており、まさに「これぞ美紗の会」と  
感じた。

到着する前に感じていた一抹の不安「三年間の空  
白」は一瞬のうちに溶解していった。

### 第六十二回美紗の会のつどいを終えて

己紗佳咏

港区立伝統文化交流館で開催された第六十二回「美  
紗の会」。十一月二十八日は東京都のコロナ感染確認  
九名で、芸を披露する緊張よりも羽が生えたような  
開放感に包まれた。

大病院勤務あるいは健康や移動制限などの理由  
で、会への参加が敵わなかった三浦さんや草詠さん、  
那須の高橋さんも顔を揃え、加藤マネージャーの気  
配りが行き渡り、お客様もリラックスした様子でた  
くさんお見えになった。

大好きな千壽文先生をみんなで囲んだ。特別な記  
念日のように明るいい日であった。七月に逝去された  
師匠のお母様が見守ってくださっている。会が成功  
するように甲斐甲斐しく私たちのお世話をしてくだ  
さった日が懐かしい。会では、お母様が師匠の伴奏  
で唄われた『山中しぐれ』のテープによる特別出演。  
舞台中央に一人座りエア伴奏する師匠の、身動き

もしない静けさが心に響いた。

会について書くようにどの執筆依頼は珍しく、師匠が送ってくださったって私の弾き語り、端唄『海晏寺』への感想を思い返した。「氣迫がこもってそれでいて静かな心境がひたひたと伝わりました。」褒められることは珍しく有頂天になった。なぜ私が？ その秘密は「草詠さんの次」という演奏順にある。前回六十一回では彼は健康の事情で自宅からリモート出演、上方唄『三國一』弾き語りを見事にやり遂げている。入会当時から暗譜の習慣は目の不自由さからと説明しているが、意識の違いだ。舞台の袖で聞いていたが、本当に素晴らしい。同じ袖にいた師匠がモニターに向かって大声で「良かったですよ」と草詠さんに声をかけている。目に涙を浮かべている。「まいったな、次の演奏者はたまったものではない。苦笑しながら舞台上がり、開き直ると曲に集中できた。

今回は草詠さんが三年ぶりに会場に来ていた。私はうれしくて側を離れず、日常のこと、稽古のこと、矢継ぎ早に尋ねて疲れさせ、その表情にあわせて距離を置いた。十二分を超える富本「反魂香」弾き語りの演奏前に集中する時間も必要だっただろう。師匠が書かれた紹介MCの中に「渾身の稽古」「魂の叫び」とあったが、その言葉にふさわしい内容だった。次の出番はまた私だが、今回は状況が違う。私は紹介MCの間、自分の演奏直前まで、袖から舞台を見ていた草詠さんをじっと見ていた。うれしくて仕方なかった。魂を引き上げてもらい、かつてない落ち着いた心で『海晏寺』の世界に入ることができたのだ。

師匠の『反魂香』を草詠さんは京都の演奏会で聴いた。遊女が闇夜に蘇る鎮魂歌で、三年ぶりの舞台にこの曲で戻りたいと師匠に懇願したそうだ。今回

の執筆にあたり会の記録DVDでみなさんの演奏を聴き直し、同じような逸話がたくさん存在することを発見した。例えば紫詠さんは『腫夜』をいつか弾き語りで演奏したいと目指していた。みんなが様々な場所で西松布詠の演奏に出会い、魅了され、いかほんの少しでもこんなふうな演奏ができたらいいなあと憧れて目指す。それが江戸小唄の人も、端唄も、新内小唄も、上方唄の人もいる。私は松岡正剛さんの会で聴いた地唄『黒髪』だった。何に惹かれるかにその人が反映する。結果として美紗の会は、名取名「己紗」が示すように一人一人の糸、聲が生かされる。そんな邦楽の会は他にない。

ところで私の演奏への師匠の感想はこんな言葉で始まる。「いつになく(氣迫がこもって)」。上げて落とされました。



●今後の予定

第六十三回 美紗の会のつとめ演奏会  
令和四年四月二十九日(金)十二時より  
港区立伝統文化交流館

■たより第65号

発行者 美紗の会  
編集責任者 照沼太佳子  
デザイナー 近藤幹則

■美紗の会

主宰 西松布咏

稽古場 港区白金台三・二・二

白金台ブレイス三階

電話 (五四四七) - 二四二二

E-mail : [nfue@soleil.ocn.ne.jp](mailto:nfue@soleil.ocn.ne.jp)

URL:<http://www.misanokai.com/>

